

肝心なことは当り前のこと

大杉茂治(原研, 核データ研究室)

前号の中嶋龍三先生の「無くて七癖」という巻頭言に大へん興味を覚えたのは、私だけだったでしょうか。

— 人の上に立つ者は、第1に、一日の計などにこだわることなく、十年あるいは百年の計をめぐらせてもらいたいもの。第2に、自分からあれこれ手を出すのではなく、下の人たちにできるだけ多くを自由に経験させ、考えさせねばならない —

下の立場から見ると、この話は、「まったくわが意を得たり。ひとつわが上層部にも読ませてやらねば…」などと、内心大いにかっさいを送りたくなるのが人情。しかし、中嶋先生の本旨は、決して上役をサカナにしたり、英雄待望論ではないと思いますので、私なりにちょっと違った角度から感想をつけ加えさせていただきます。

指導部と構成メンバー 組織体の指導部の資質は、まさに中嶋先生ご指摘のとおりでなければみんなの力を発揮させることはできないと思いますが、同時にそのようなすぐれた指導部を生み出すかどうかは、その組織全体の実力なり水準を反映しているともいえるのではないかと。指導部自身、組織の一員であってその中で育てられ、選任され、きたえられるわけですから、組織全体に、そのようなすぐれた土壌が函養されていることが一方で必要でしょう。もっとも、だからこそ、上に立つ者は、一日の計よりそのような土壌作りが長期的に大切なのでしょう。指導部と構成メンバーの間にはそういった相互関係があるように思います。

もうひとつ。多様な考え、専門分野にわたる人々が、それぞれに、またまとまって全体としての力を発揮するには、あれやこれやの手段でではなく、一番肝心なことで、つまり構成メンバーに共通の基本目的にかかわるところで、メンバーのすみずみまで疑念の残るところなく意思統一が行きわたってやる気になっていることではないかと思います。日常さまざまな処理すべき事項について意見がくいちがうのはあたり前のこと。これにこだわってはいよくないけれども、一見小さく見えることでも、組織の目的にかかわる重要な問題を含んでいる場合もあり、そのような場合には、そのホットな具体的事例を通じて、根本までさかのぼった論議も、必要であろうと思います。逆に、よく作られる官僚作文の長期計画、あれは、肝心なところをぼかすことが多いので、組織の力量を発揮するには役立たないのではないのでしょうか。大事なことでのなれ合いは禁物という気がします。

つまり組織論を並べましたが、私自身、いま労働組合の責任者を引きうけている事情もあって関心をひかれた次第です。

さて、私は、核データ関係の事務局の仕事にたずさわって1年あまり、最も敬服しているのは、

この地味な、縁の下の力持ちの仕事への原研内外の関係研究者の粘り強い追求力です。このエネルギーの秘密のひとつは、他にあまり類を見ない委員会制度 — 単なるおしゃべり委員会ではなく、専門部会、ワーキンググループなど実働のグループをもった — を、十分に生かして、自主性を発揮しながら研究者相互の緊密な協力体制がとられてきたという点にあるのではないのでしょうか。これが、予算や人員の制約をのりこえて、活力を持続してきた大きな原因となっている気がします。

とはいえ、核データをめぐる情勢も、ずい分変わってきているようです。今年から核燃料計量核データの専門部会が正式に発足しましたが、このことひとつが示すように、核データへの需要の巾や深さも動きつつあります。核融合や医療の分野などとの関係も生まれようとしています。さらに、一般的な情報処理・流通システムの動向や、基礎理論面との相互関係なども考慮に入れる必要があるのかも知れません。

シグマ研究委員会は、鋭い論客多数をそろえ、カンカンガクガクの論議で有名な伝統？をもっていると聞いております。核データセンタの発足が見送られ、ある意味では決して恵まれたとは云えない状況にあるだけに、最近の正確な情勢認識に立って、いま一度何が、このグループにとって、基本的に肝心なことなのか、徹底した論議で整理してみる機会をもうけては、いかがなものでしょうか。

最も肝心なことというのは、多くの場合、もっとも当り前のこととなる、という経験を、しばしばするものです。そして、ねり上げられたうえでの当り前の結論こそだれにも受けいれられ、理解されるものではないのでしょうか。